天龍村
あいが隊新聞
Vol.79
2019年11月28日
編集者：本多紗智

本多紗智

初瀬健太

前田美沙

篠田大樹

はじめまして、十一月から地域おこし協力隊になりました、篠田大樹（しのだたいき）と申します。出身は静岡県（主に静岡市）で、大学入学以降は十年間、岩手県盛岡市に住んでいました。しかし、農業や農作物の加工販売を行いたいと思い、今年の4月いっぱいで前職を辞め、縁あって南信濃に移住し、勉強も兼ねて農林業六社でアルバイトをさせてもらっていました。

その中で協力隊員の方のお茶の営業に同行させてもらったり、熊谷副社長をはじめ、協力隊員の方に協力隊になることを勧めていただいたりして協力隊の魅力や、やりがいに触れることができました。そこで協力隊になったら農業だけでなく、大学時代に勉強したこと（農村環境や地域おこし等）や前職（広告・看板等のデザイン・製作・営業販売）で培った経験や能力を生かせるとともに、自分の成長にもつなげられると思い応募しました。

自分の主な活動は農林業六社の野菜やお茶、ゆず等の栽培、管理、収穫等を通して村内の遊休荒廃地の活用や村内の農業振興に努めることになります。しかし、大きな圃場で大規模経営が行われている地域に単純な野菜生産だけでは太刀打ちできないと思いますので天龍村の農作物を生かした加工品の製造や、販売まで手掛ける6次産業化にも力を入れて取り組みたいと思っています。また、中井侍のお茶の維持管理や販路開拓、商品開発にも携わっていきたいと思います。また、村のPRにも努めたいと思います。

盛岡にいるときは「地域おこし協力隊」という単語は聞いたことがなく、周りにもその存在を知っている人はほとんどいなかったのではないかと思います。しかし移住してきて農林業六社で仕事をするようになってからは「協力隊の方？」「ありが隊なの？」と言った声をかけられることが度々あり、村内で協力隊という存在がいかに浸透しているかがわかり、注目度や期待の大きさを感じています。その責任を背負い、精一杯活動に打ち込み、人生経験豊富な諸先輩方から見ればまだまだ、無知な子どもで、ご指導を仰ぐことも多いかと思いますがよろしくお願いいたします。

文：篠田大樹

とじしろ

まえだの天龍山暮らし～入門～

文：前田美沙

地域おこし協力隊の前田です。朝晩だいぶ寒くなってきましたね。最近は主にお茶の肥料撒きをしたり、茶株の秋整枝をしたりしていました。秋整枝は茶摘みに影響してくるとても大切な作業なので、とにかく緊張します。どうやって刈ろうか悩んでいた所、中井侍の農家さんが忙しい間を縫って刈り方を指導してくださり、なんとか終える事が出来ました。登さん、ありがとうございました。

整枝作業はどんどん綺麗になる姿がとても楽しいので好きなのですが、自分の刈り方がまともにできているのか、春にどういう姿になるのかという不安がよぎります。（しかし私は調子に乗りやすいので、その位の緊張感が丁度よいのかもしれません。）

最近もう一つ、「お茶の実から油を搾りたい」という夢を叶えるべく、搾油に挑戦していました。お茶の実は沢山落ちているのですが、搾油をした事のある方がおらず、独学であれこれ試しては失敗を繰り返しておりました。

粘った結果、なんとか少量ながら茶の実油を搾油することに成功しました。肌に良いそうで、塗った感じはべたつかずサラリとした感じ。ナッツのような香ばしい香りが印象的な、思った以上に良い油となりました。

味の方は搾りたてはクセがなくて美味しかったのですが、一日置くと酸化したのか、後味が苦くなってしまいました。まだまだ改良の余地がありそうです。茶の実の利用をすることで、茶畑の有休荒廃地の活用や冬の収入確保などに役立てていけないかと考えています。搾油に興味がある、搾油したことがあるという方はお声がけいただけると嬉しいです。

とじしろ

刻々天龍村　霜月だより

本多　紗智

一気に寒くなってきましたね。私はもう既に数回、風邪をひいています。ところで、十一月は旧暦で「霜月」といいますね。

「冬場になってくると太陽が力を失ってくる、陽射しも弱くなってくる。それを甦らせるために、また春になって暖かくなりますように、そういうことを願って始まったのが霜月神楽なんだよ」と聞かせてくださった村の方のお話が蘇ります。

ようやく「ききがたり×ものがたり 天龍村」の試作版というのか、お話を聞かせてくれた方にお礼として渡す分の冊子第一弾が出来ました。テンプレートを使わずに、完全なゼロから作成したのは初めてだったので、入稿してから何度もデータエラーによる修正依頼が来てしまい途方に暮れそうでしたが、ようやく人に見ていただける形になってホッとしました。冬もいろいろな方にお話を聞きに行こうと思います。

十一月九日(土)に、東京の國學院大學で南信州民俗芸能フォーラム「日本の神楽と向方のお潔め祭り」が開催されました。過去の記録映像に加え、有識者による講義の中にも祭りの背景を知るための貴重な情報が散りばめられていました。今回は記録よりも目で観ることを心掛けたのですが、神楽の文化としては優に千年を超える歴史の中で、人から人へ受けつがれてきた伝承と「そこにあったかもしれない物語」を想像しながら見る、優雅でダイナミックな演舞の中にある凛とした力強さに感動しました。「神楽は実際に観て心で感じて、ようやく腑に落ちるもの」という小川直之教授の言葉が少し腑に落ちた気がしました。向方お潔め祭り芸能部の方々お疲れさまでした。

やはり私は天龍村の霜月神楽を始めとする重層的な文化と歴史や、ここに根を張って力強く生きている人たちの持つストーリーに魅力を感じているんだなぁと改めて思います。先日、知り合いの地域おこし協力隊の大先輩がたまたま村に立ち寄ってくれ、色々お話する中で数々の貴重なアドバイスや提案をいただきました。「協力隊はまず、地域のサポーターである」という言葉にいろいろと考えさせられています。とりあえず当面の目標は「風邪をひかない」なんだか情けない話ですが、ひとまずこれが一番の優先事項かもしれません。

ゆらゆら変遷記～天龍村Ver.～

初瀬健太

あはんり、気収膨し逸量らたれのとこに等り起道同かで脇とっ一は年タ聞昨はク新粒ラの

が、ト月ん、は今せ後ませ穫で、りま収のはかす。たけだ然段でで分で落

わま瞭とたは目ひし味一も算食と事計やる仕に量べ確合比で、正混とけね。

のちわは。米まうに点こいま斑たうたりめきそわたあ。す。

終いたす。まになえまい事い終い思無てをてともし穫しう穫を収をよ収米にけみの精先づてリ。、片しカすくの歩ヒでき等散シう大トにコそてッまりいネま

4月とか作業をのらど合に学本題に作本くにら奥れ、は、も生を図

3たる続背遮な場し中に課ロロ

で、しあも棚か食けつた。前に

とて力本何飲受暇しくのボロ

のっい中やをはで書生かボ

いょ童集てり館業でんを校ぜま

なちにがいた書授今せ想高なて

はて館うてっ図で昨年先無当の験にで語し著こ

でし書ほめかのりたしもす。ま感。

けう図る決他として題ずはまか時れしは模解擬しま題。まれ

わこ、あ、がも、ひまん宿いまくまとのを模とし。すきし

る、てのもの界でもいなのない読のたのい書験問のりでた。までも

あり、いい目る席視き代て書文もも語ていえま読受各かみんししんか

がだで人座に好時っ読想とジ理国えま教しに一もつん込でが読た

事んん)ぎが生願ぼ感こ一処理の教しに一もつん込でが読た

仕読込し、ね)ところ学くほ書だ1ペ一処理国えま教しに一もつん込でが読た

にをちだどたこ。さは読んはど1年誰しよンい。も読問なまか

特本持屈けど見とす小で。読』後校くきこ。すしとつ白よでも

は、に窮をいま回ますに黙の学な泣。たままがい面た度と

末て常はなりない毎ろで的沈そ小めますしりて説ついい頻こ。

週いはのい周じてをこい体『。読まままあし小、らてのす～。

のて本すどと感しとのら主のたすがたいりずにのてぐ似いごで

場来むご(殆ッをにこ生ぐを作しま字ってあ必うそったにら過ま

冬と読過ばパ配うい校だ書周まりう立っががよ、あし風ぐをこ

る。でれ。気よな高ん科藤れかいで残け題るろもを作る間こ

すなす中けすのぶ来、読教遠さかとさくか問すこチ話のえ時は

まにまのなま人選もがけのと見が一し濃っう握とオて清言で月

い末い家いきにを誰すだ語』発間火悔はきい把たとい松と館今

て週てをが置後席にで冊国ろで時「とけつとをめつ重味書で

来にし日客を背うろん数、こ一も、さだ持いれ始ちにか趣図の

に的ご一先物つい後いでしこカりがし憶をさ流みきと吾てい

館慣過丸。荷かう真多れた『ッよすか記味なの読でこ圭め、しな

書習を、すに、そ、がそっの口人ずずの興え体を確の野始うら

図は間がま子てもでと、だ石のん恥そに答全文明そ東みこ足

ので時すい椅せてんこて難漱ろ他たい、本にと本がとと読、が

村またでての渡っ選るっ困目後くっなにいい容、結達すをば、枠

龍頃しんっ隣見行をめ行で夏になあめの時間内め転友返説れ、

天るという右をに席埋流痛た末はが読いのでにた承、い小けが、

に残りなものノこのをが苦れ年でと、な生ん把く起て思らなす

りがくにてそモど端間説がさ学意こと て験読雑解ずしまかわで

ぶさっ多せ、くは両時小と布で得る圧え受を大をら直いて会ん

し寒ゆ滅わり広時もで帯こ配能がす重覚、説て題わみ、っ出る

久だらは使座はのりん携るて状き読くが小し問か読がわにあ

ままがとをにりよ読に切した書朗い全すた流のかにす終題が

いのなこと子よと央を時みとっみをてはでしみ説も後でが問と

月しむこ椅るひ中本の読書な読書き顔ん粋読小にたの験のこ